

玄宗の泰陵踏査記

藤善眞澄

1990年8月 本学を含む三大学30名ほどを引率して、恐らく誰も試みたことのないであろうコースの中国史蹟巡りの旅を敢行した。名古屋から開設されたばかりの西安空港へ飛び、汽車で甘肅省の天水に向い待機していたバスに乗りかえ、南に下り麦積山の石窟群を見学。幸いにも陝西師範大学での教え子が西安旅遊社の幹部となっており、あらかじめ西安から天水へバス一台を特別に廻して置いてくれたお蔭で、スムーズに事が運んだ。

この旅の圧巻は三ヶ所。第一は麦積山より北上して天水にもどり、一泊のち渭水を渡って海拔二千メートル余り、隴山山脈の尾根づたいにひた走るコース。後漢末・三国時代に始まり「村」のルーツとなった塢・壘・壁などもかかやと思わせる聚落が点在し、黄砂ではなく白砂の山肌に緑樹が影を投げかける見事な風景に、ただ絶句するばかりであった。第二は張家川の回族自治区へ抜け、固関鎮より渭水へ流れ込む千河ぞいに下り、隴県・千陽県を經由して鳳翔へ、そして仏指舍利の発見で沸く岐山の法門寺参詣である。法門寺の歴史と舍利塔の由来を学生達に説明し、あわせて「岐阜」の名の由来と

なった岐山と、周の祖先の古公亶父が南麓に城郭都市を建設し、周王朝の基礎を固めた経緯を語り、舍利塔の崩壊によって現出した地下宮殿を見学した。

三番目が、ここに紹介する玄宗の泰陵である。法門寺より西安に向う途中、『漢書』の撰者班固の墓、そして二度目となる馬嵬鎮の楊貴妃墓を訪ずれ、突如として出現した楊貴妃観音にど肝を抜かれ、燥きまわる学生達を恨めしく眺めることであった。西安で休養の二日を過ぎ中国の友人達に別れを告げ、遙か北の山西省太原へ。西安で運転手ごと車を換え、渭水を北へ渡り高陵県をすぎ、唐高祖李淵の獻陵を左に望みながら富平県をへて一路蒲城県へとひた走った。それまで外国人の見学者はほとんどなく、ガイドや運転手も初めてというだけに、道順を尋ね尋ねの道行きであったが、前方にそれらしき山嵬を望見するや、胸の鼓動が高鳴り始めた。昭和41年に『安祿山』を執筆してこのかた、一度は訪ねてみたいと願った泰陵である。

蒲城は玄宗時代の奉先県である。玄宗の父睿宗が葬られた橋陵にちなんで奉先の県名が生れた。県城の西北約17キロに豊山、別名蘇愚山があり、豊山の東に金職山があり11代憲宗の景陵がある。金職山とは東北の峰つづき堯山、一名浮山には12代穆宗の光陵、その東方に位置するのが金粟山すなわち泰陵である。山上の碎石が金の粟に似たところから名づけられたと伝えるが、道教に心酔した玄宗には皮肉なことに、李白が「金粟如来 是れ後身」と詠じたように維摩居士を金粟如来とする呼びかたも行われていたのである。

唐の18陵は高祖の獻陵を頭として鳥が東西に翼をひろげた姿に配置されており、西(右)端が梁山の高宗・武則天陵すなわち乾陵ならば、東(左)端が泰陵である。

上元二年(761)四月、甲寅、神龍殿に崩ず。時に年七十八。群臣、諡を上つりて至道大聖大明孝皇帝と曰う。廟号は玄宗(『旧唐書』玄宗本紀)



写真1 唐玄宗泰陵碑



写真2 泰陵遠景

玄宗の崩御を伝えたくだりである。この年に建子の月（11月）を歳首と定めたり、翌年4月には肅宗が崩じて代宗が即位、元号を宝応と改めたこともあり混乱を招いているが、正しくは肅宗の上元三年（762）四月五日（陽暦5月4日）である。肅宗は奇しくも玄宗に遅れること僅か13日、4月18日に52才の生涯を閉じており、宦官李輔国の陰謀説もささやかれた。玄宗が李輔国の讒言により南内の興慶宮から西内に移され、幽閉同然の余生を送っていたのであるから、無理もない話である。

先旨を追奉して以て寢園を創り、広徳元年（宝応二年 763）三月辛酉（18日）、泰陵に葬る。

文にいう先旨とは開元十七年（729）十一月、高祖の獻陵をはじめ太宗の昭陵、高宗の乾陵、中宗の定陵そして睿宗の橋陵に親しく拝謁したとき、金粟山を望んで竜がとぐろを巻き、鳳が飛翔する氣勢がある山だとぞっこん惚れ込み、父の陵墓も近く孝敬の志を忘れずにすむから、かの金粟山に葬って欲しいと漏したことを指す。こうして営まれたのが泰陵であり、時に猖獗をきわめた安史の乱が平定されて2ヶ月後のことであった。

今に残る玄宗の「遺詔」（『全唐文』巻38）には葬送儀礼について細ごまと訓示したのち、艱難の際にあり国家多端の折から、葬送の儀は



写真3 参道石像群

儉約に従い贅を省くよう遺言している。稀代の遊蕩児も、自らが招いた安史の乱により、朝野をあげて塗炭の苦しみに喘いだとあっては、さすがに悔恨の情切なるものがあつたに違いない。「特に宜しく裁改し、常規を守ること無かるべし」-前例にならって盛大な葬儀を営まないように-と誠めている。

それにしても前五陵の見事さにくらべ、泰陵は格段に見劣りがする。荒廃の程度にもよろう

が参道ぞいの石像等も貧弱であり、数も少なく、ひたすら不老長生を願い、楊貴妃を失ってからはなおさら死後の世界にこだわりを持った玄宗には、まことに不釣合いな寂しい陵寢である。高宗の乾陵もしかり、玄宗が常に意識していた太宗の昭陵にいたっては、太宗自らが12年間、実に貞観の治世の半ばを費し、莫大な経費と人力を投じて営んだ壽陵であった。

昭陵については紹介する機会もあろうが、泰陵との根本的な違いは陪葬墓の多さであろう。献陵25、乾陵16、定陵8、橋陵7はまだしも、昭陵156に対し泰陵1では比較にもならない。これは造営者の代宗が責を負うべきものではなく、陪葬は官費で賄われるため、財政の逼迫している代宗朝では、万やむを得ない仕儀であったと考えたい。なぜなら肅宗の建陵も、陪葬は尚父と仰がれた元勳の郭子儀一人であり、他に理由もあろうが代宗の元陵、徳宗の崇陵、憲宗の豊陵はいずれも陪葬ゼロなのである。

泰陵には唯一の陪葬墓がある。玄宗が宮中で阿翁とか將軍と呼ばせていた宦官高力士のものである。彼は玄宗が興慶宮から西内に移されたとき不穏な謀議に加わったと李輔国に誣奏され巫州、今の湖南省黔陽県に流された。たまたま罪に問われ左遷された史官の柳芳が高力士と邂逅。柳芳は有名な歴史家呉兢の『国史』を、韋述と一緒に補修しなおしたものの、玄宗以後の叙述は巧くいかず閑落した部分が多かったの



写真4 痰道開口部

で、これ幸いと高力士に禁中の内情や政治むきのことを訊ね、『唐曆』40巻を撰述した（『旧唐書』149・柳登伝）。わが円仁や円載などの入唐時に、宰相であった李徳裕の『次柳氏旧聞』という作品がある。この書こそ散佚した柳芳の聞書をもとに構成された、高力士口伝の玄宗朝エピソード集にはかならない。

巫州にあること一年半、代宗の宝応元年（762）三月、許されて都へ帰る途中、朗州（湖南省常德市）に着いたとき、これも長安より配所に向う流人と出会い、玄宗が崩じたことを知らされた。高力士は遙か遠い都長安を望んで慟哭し、そのまま病の床につき同年七月、宿泊先の竜興寺で血を吐きながら息絶えたという。79才であった。代宗は玄宗朝における彼の功績を高く評価し、揚州大都督を贈って泰陵に陪葬することにした。王昶の『金石萃編』（巻100）に「高力士残碑」を収録しており、碑額に「大唐故開府儀同三司贈揚州大都督高公神道碑」と題され

大歴十二年歲次丁巳五月辛亥朔十一日辛酉奉

勅□

と刻まれている。つまり没後16年目に建てられているが、これが陪葬のときか、あるいは泰陵全域の補修整備にともなう所作かは、今一つ明白でない。王昶の実見した上部半截だけの神道碑は行方知れずになっていたが、1963年に発見され、さらに71年の調査で下部半截も畜産農家から発見、『考古与文物』1983年第3期に全容が紹介された。なお94年に三秦出版社の『全唐文補遺』第一輯がこれを採録している。

われわれが泰陵を訪ずれた時にも、ふと立寄った近隣の農家で、明らかに泰陵のそれと分る、さしずめ中国版漬物石と称すべき類のものを目にし胸を傷めた記憶が鮮明に甦る。大歴十二年といえば光仁天皇の宝亀八年にあたる。わが国ならば国宝級の文物が、柱の土台や踏石に使われている現実にも長嘆息しながら、泰陵に別れを告げた。